

白い天井ばかり見ていたら、頭まで白くなってきた。

検査センターに来てから、もう三時間が過ぎていた。

先週の金曜日、健康診断で「専門的な精密検査が必要です」と言われた。そのまま案内されたのが、この妙に大きな、白亜の施設だった。

（体感だと、特におかしなところとか、ないんだけど……）

待合室のソファに座りながら、なつめはぼんやりと考える。

趣味は読書と映画鑑賞。元氣なときには「地味だけど健康だけが取り柄です」と笑っていたのに、まさかこんな検査を受けることになるとは。

「藤本さん、担当の来栖です。少しよろしいですか？」

「は、はい」

声の方を慌てて向くと、白衣の男が立っていた。

百八十センチは優に超える長身で、白衣越しでも分かるくらい胸と肩に厚みがある。肩幅が広くて、扉を横向きにくぐりそうなほどだった。彫りの深い、整った顔立ち。目元が涼しくて鼻梁が高い。無表情なのに、なぜかひどく目を引く顔だ。三十代前半くらいだろうか。眼鏡の奥の目が、静かになつめを見下ろしている。

「今日の検査を担当します。当院では、問診から本検査まで同じ医師が主担当として対応します。検査室までどうぞ」

低く、よく通る声だった。なつめはなんとなく圧を感じながら、おとなしく案内された検査室に入り、椅子へ腰かける。

「今日から精密検査を始めます。いくつか気になる所見があったので」

「気になる……所見？」

「婦人科的な問題の可能性があります」

なつめは思わず顔を赤らめた。婦人科。あまり得意な分野ではない。

「そ、そうなんですか……」

「本日の検査を開始します。準備しておいてください」

それだけ言って、来栖は静かに一旦部屋を出ていった。なつめはぼんやりとその背中を見送り、また天井を見上げた。

（どうせなら、女の先生が良かったなあ……）

婦人科検査。なんとなく嫌な予感がした。

「失礼します、藤本さん」

しばらくして来栖が戻ってきたとき、後ろに二人の男を連れていた。どちらも白衣を着ているが、体格がどう見ても普通じゃない。

一人は来栖と同じくらいの長身で、二十代後半ほどの男だ。目つきは鋭いが、よく見れば目鼻立ちが俳優みたいに整っている。名札には「黒沢」とある。

もう一人は、さらに横幅のある巨漢だった。筋肉の塊みたいな体で、白衣のボタンが今にも飛びそうだ。でも顔だけ見れば、大型犬みたいな穏やかで甘い美貌の持ち主で、にこりと笑うと白い歯がのぞいてあどけなさすら感じる。三人の中でいちばん若く、二十代半ばくらいだろうか。体格と顔のギャップがすごい。名札には「堂島」とある。

（来栖先生も、黒沢先生も、堂島先生も……三人とも、すごいイケメン

……)

なつめはひとり内心で感心しながら、三人の顔を交互に見上げた。

「検査の補助として、この二人にも立ち会ってもらいます」

「え、三人で……？」

「精密検査ですので、複数人で確認する必要があります」

「……は、はい」

「では始めましょう。検査台の上で仰向けになって、膝を立ててください」

言われるままに横になる。検査着の裾がめくり上げられて、素肌に空気が触れた。なつめの心臓がどきどきし始める。

「……あの、来栖先生」

「なんですか」

「婦人科検査って、具体的にどんな……」

「直接確認します。おまんこの状態を、詳しく診察します」

なつめは全身の血が顔に集まるような感覚を覚えた。

「お、おまんこの、検査ですか……でも、あの、ちょっと……」

「医学的な診察ですから。少し、我慢してくださいね」

来栖は淡々と言いながら、なつめの膝をゆっくりと開かせた。ショーツが引き下ろされて、下半身が完全に露わになる。なつめは両腕で顔を覆った。

「ひっ……」

（見られてる……っ、三人の先生に……おまんこを……）

「では、視診から始めます」

三人の視線が、なつめのおまんこに集中した。じつくりと、余すところなく見られている感覚がある。なつめの体が、反射的にじんわりと熱くなり始めた。

「……クリトリスが少し赤いですね」

来栖が淡々と所見を述べる。黒沢が顎に手を当てながら頷く。

「炎症ではなさそうです。充血かな。おまんこ全体も潤んでいる」

「触診します」

来栖の大きな指が、なつめのクリトリスに触れた。
むにゅ♡と柔らかな感触が指先に伝わる。

「ひっ……♡」

「クリトリスへの刺激で痛みは？」

「い、痛くは……ないですけど……」

「では続けますね」

来栖の指がゆっくりとクリトリスを撫で回す。
むにゅ♡むにゅ♡こり♡こり♡

「んっ……♡んん……っ♡♡」

「過敏になっていきますね。おまんこの内部も確認します」

来栖の指が、今度はおまんこの入り口にあてがわれる。ゆっくりと、探るように触れる。

ぬちゅ♡

「もう濡れています。クリトリスを触っただけでこれほど。おまんこの反応が非常に強いようですね」

「そ、それは……仕方ないじゃないですか……っ♡触られたら……」

「診察中に性的な反応が出るのは、過敏性の証拠です。記録しておきます」

来栖はそう言いながら、指を少しだけおまんこの中に入れた。

ぬぷ♡

「ひぁ……っ♡」

なつめは声が出てしまったことに顔を赤らめた。来栖の指がおまんこの中でゆっくりと動く。

ちゅぷ♡ちゅぷ♡ちゅぷ♡

「おまんこが収縮しています。締め付けが強い。黒沢先生、確認してもらえますか」

「ええ」

黒沢がベッドサイドに近づいて、来栖と交代するように指をおまんこに入れた。

「……本当だ。かなり敏感になってる。なつめさん、おまんこはいつもこんな感じなんですか？」

「い、いつもってどういう……♡んっ♡♡♡」

「普段、自分でクリトリスやおまんこを触ることはありますか」

「そんなこと……聞かないでください……っ♡」

黒沢の指がおまんこの中をかき混ぜるように動く。

ぬちゅ♡ぬちゅ♡ぬちゅ♡

「っ♡んっ……♡あっ……♡」

なつめは唇を噛んで声を堪えようとするが、うまくいかない。黒沢の指使いにどこか余裕が滲んでいて、それがまた羞恥心を煽った。

「正直に答えてもらわないと、診察が進みません」

「……たまに、します……♡でも、こんなに……こんなにおまんこが感じたことは……」

「それは内診の刺激のせいでしょう。堂島先生も確認を」

今度は堂島の手が来た。指が太い。来栖や黒沢より明らかに太い。その指がゆっくりとおまんこの中に押し入ると、内側を満たされるような感覚があった。

「んっ♡♡」

（おまんこが……広げられてる……っ♡）

「痛いですか？」

「い、痛くは……ないです……♡ただ、その……おまんこの中、が、いっぱい……♡」

堂島の指がおまんこの中を押し広げながら動く。

ぬぷ♡ぬぷ♡ぬぷっ♡

「締め付けてきますね。おまんこが指を食いしめています」

「ちが……ちがいます……っ♡からだが……勝手に……っ♡」

目の端に涙が滲む。堂島は穏やかな顔のまま、ゆっくりと指を増やす。
ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡

「んあっ……♡あんっ……♡んっ、んっ……♡」

「奥まで確認します」

「え……っ♡奥って……ああッ♡♡おまんこの……奥に……届いて……っ♡」

指が深くまで届く。子宮口近くをゆっくりと押すように動いていた。

（ヤバっ……こんなのされたら……おかしくなっちゃう……っ♡おまんこ

がひくひくしてる……っ♡)

「先ほどよりさらに分泌が増えています。来栖先生、どう見ますか」

「特殊な過敏体質の可能性があります。刺激のあとに感度がどう変化するか確かめるため、今後は毎日、定期的な検査が必要でしょう」

「まい……毎日……っ？」

「はい。症状を詳細に記録するために」

なつめはその言葉の意味を理解する前に、また新たな刺激に意識を持っていかれた。堂島の指がおまんこの中で広げられながら、黒沢の指がクリトリスを同時に責め始めた。

こり♡こり♡こり♡

「ひっ……♡♡やっ……クリも……っ、同時はっ……♡おまんこと一緒にしないでっ……♡」

「クリトリスとおまんこへの複合刺激で反応を確認するための検査です」

来栖がさも当然のように言いながら、なつめの様子を観察している。その冷静な目に見つめられながら、なつめは必死に理性を保とうとした。

「んっ♡んっ♡あっ♡♡あんっ♡」

（クリが……クリを、こりこりされるたびに……腰が勝手に動いちゃうっ♡）

堂島の指がおまんこの中を揺さぶり、黒沢の指がクリトリスを転がし、来栖がじっと見ている。三重の責めに、体が急速に頂点へと向かっていく。

「や……やだ……っ♡イっちゃ……イっちゃいます……っ♡」

「構いません。症状として記録します」

「そんなのっ♡だめ、だめっ♡♡」

「ではおまんこが今どんな状態か、詳しく教えてください」

「き、気持ちよくて……っ♡♡指がいっぱいで……おまんこのなか……キョんキョんして……っ♡クリトリスも……こりこりされてっ……はあッ♡♡」

「では、このまま経過観察します」

「え、やっ……まだ動かすのっ……♡あっ♡あぁっ♡♡」

ぐちゅぐちゅぐちゅ♡ぐちゅぐちゅぐちゅ♡

こりこり♡こりこり♡

「んッ……♡いく……っ♡いっちゃう……っ、ほんとに……ッ♡♡クリとおまんこ同時はっ……ッ♡♡」

「声を堪えなくていいです。症状の一部として記録します」

「やあぁっ……♡んっ♡あぁっ♡イク……っイクううッ♡♡♡」

ガクンッ♡と腰が跳ねて、シーツを両手でぎゅっと握りしめた。

おまんこがぎゅう♡♡と堂島の指を締め付けながら、体の奥からじわじわと溢れ出す快感が全身を駆け抜ける。頭が白くなるような絶頂が、ゆっくりと過ぎ去っていった。

ぼんやりとした目で天井を見上げた。

「は……あ……♡はぁ……♡」

「では次の検査に移ります」

「つぎ……？」

茫然としながら顔を向けると、来栖が白衣のボタンを外しているのが見えた。

(……え?)

「こ、来栖先生……?」

「直接的な検査が必要です。おちんぽを挿入して、おまんこの内部を診察します」

「そ、それって……♡」

「藤本さんの体のためですから」

来栖はそれだけ言って、なつめの膝をゆっくりと押し広げた。ズボンが下ろされると、立派なおちんぽが現れた。長くて太い。先端がすでに固く張り詰めている。

「……挿入します」

おちんぽの先端がおまんこの入り口に押し当てられた。

ぬぷっ♡

「ひっ……♡」

少しずつ、でも確実に奥へと進んでくる。おまんこの膣壁がみちみちと押し広げられていく感覚がした。

「あ……っ♡ふとい……っ♡来栖先生のおちんぼ、大きいっ♡」

おちんぼが全部入ったとき、無意識に息を飲んだ。腹の奥まで届いている感覚。子宮を内側から押されるような、深くて重い圧迫感がある。

（こんなに……奥まで……おちんぼが入ったの……っ♡初めてえ……っ♡）
「内壁の状態を確認します。動きます」

ずるっ♡

「んっ……♡」

ゆっくりと引き抜かれて、またゆっくりと押し込まれる。来栖は感情を排したような無表情のまま、淡々とした動きで腰を動かしていた。しかしそのおちんぽが、的確になつめのいいところを捉えていた。

ぬぷっ♡ぬぷっ♡ぬぷっ♡

「あっ……♡あっ……♡あ……っ、おちんぽが……そこ……っ♡」

「感じる部位を教えてください。記録します」

「い、言えません……っ♡言えるわけ……っ♡♡」

「診察です」

「んっ♡おまんこの浅いところ……っ♡おちんぽの力りが、当たる、とこ

……っ♡♡

「ここですか」

来栖が意図的にそのおまんこの浅い部位を擦るような動きをした。

ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡

「ひあっ♡♡そこです……っ♡♡そこのおまんこが……キモチイイですっ♡♡おちんぼのカリで擦られてっ♡♡」

「記録。では奥の状態は？」

ずんっ♡

「んっ……♡♡奥……っ♡♡おまんこの奥も……っ、すごいです……っ♡」

「子宮口におちんぼが当たっている感覚は？」

「あ……あります……っ♡♡ごっごっ……おちんぼの先が突き上げて
る……っ♡子宮口がノックされてるみたいで……っ♡」

来栖が少しペースを上げた。

ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡

「んっ♡あんっ♡はあん……っ♡あっ♡あっ♡♡おちんぼが……おちんぼ
がずっとおまんこをかき混ぜてる……っ♡」

黒沢が横から覗き込んで、なつめの乳首に触れた。ぎゅっと摘まむよう
に。

こりっ♡

「ひあっ♡♡や……そこも触るんですか……っ♡」

「乳首の反応も確認します」

黒沢が丁寧に、でもしつこく乳首を転がしながら言う。

こりこり♡こりこり♡むにゅ♡むにゅ♡

「あっ♡あっ♡やっ……乳首も……おちんぽも……同時はっ……♡♡乳首こりこりされたら……おまんこがきゅってなるっ……♡」

「反応が強いですね。堂島先生、クリトリスをお願いします」

「了解です」

堂島の太い指がゆっくりとクリトリスを撫で始める。

こり♡こり♡こり♡

「んっ……♡♡み、みんなで同時に……っ♡乳首もクリトリスもおまんこ

も……っ♡♡だめえ♡♡」

「検査ですから」

来栖がぬかりなく答えながら、腰の動きをさらに強める。

ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ずんっ♡ずんっ♡

「あっ♡あっ♡あんっ♡んあっ♡♡おちんぽでおまんこかき混ぜられて
……っ♡乳首もクリも同時はっ……っ♡」

黒沢が乳首を指の腹で転がしながら、ときどきぴんっと弾く。

「んっ♡やっ……そんな……っ♡乳首ぴんってしないで……っ♡♡おまん
こがビクってなるっ……♡」

「感度がいいですね。乳首も敏感体質のようだ」

「当たり前じゃないですか……っ♡おちんぽが中でごりごりしてるのに乳首まで……っ♡あっ♡♡あっ♡♡」

堂島のクリトリス責めが少し強くなった。圧をかけながら、小刻みに震わすように。

ぷるぷる♡ぷるぷる♡

「ひあっ♡♡クリトリス……っ♡クリがっ……しびれるっ……♡♡クリトリスだけで……もうっ……♡」

（やばい……やばい……っ♡乳首とクリトリスとおまんこ、三か所同時に責められたら……もう……っ♡）

「おまんこの具合を教えてください。今どんな状態ですか」

来栖が静かに問う。なつめは半泣きになりながら答えた。

「ぐ……ぐちゅぐちゅに……なってます……っ♡来栖先生のおちんぽが……動くたびに……おまんこがきゅきゅって締まって……っ♡子宮まで響いて……おまんこの奥が……溶けそうで……っ♡♡」

「もっと詳しく」

「っ……クリトリスが……こりこりされるたびに……腰が……勝手に動いちゃって……っ♡乳首も……びりびりして……全部繋がってるみたいで……っ♡おちんぽでおまんこを突かれるたびに……もう……イきそうです……っ♡♡♡」

「では、そのまま達してください。症状として記録します」

ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡ずぷっ♡ずぷっ♡ずぷっ♡

「ひっ……♡ひいっ……♡あっ♡あんっ♡ああッ♡♡おちんぽが……おまんこの奥まで……ッ♡♡」

ずちゅっ♡ずちゅっ♡ずちゅっ♡ずちゅっ♡

「んっ♡いく……っ♡いくッ……先生……っ♡おちんぽでイっちゃいますう……ッ♡♡」

「腰を逃がさないでください」

来栖の手がなつめの腰を掴んで固定する。黒沢が乳首を強めに摘まみ、堂島がクリトリスをぎゅっと押した。

「んあ……ッ♡♡♡イぐっ……ッ♡イぐう……っ♡イぐっ……ッ♡♡♡来栖先生のおちんぽで……おまんこイっちゃいますう……ッ♡♡」

ガクンッ♡ビクッ♡ビクンッ♡

なつめの体が大きく跳ねて、おまんこがぎゅうううう♡♡と来栖のお

ちんぽを締め付ける。

どちゅんっ♡とおまんこの深いところに打ち付けられながら、どくっ♡どくっ♡と温かいものが注ぎ込まれた。絶頂の余韻の中でそれを受け止めながら、夢うつつのまま天井を見上げた。

「は……あ……♡はあ……♡♡」

来栖がゆっくりとおちんぽを引き抜く。おまんこからとろりと零れ落ちてくる感触がした。

「では次の検査者と交代します」

「つぎ……？」

まだ意識がぼやけているなつめの視界に、黒沢がネクタイを緩めながら

近づいてくるのが映った。

「では代わりますよ」

黒沢は来栖と違って、目の奥がギラついているように見えた。

「黒沢先生まで……っ♡」

「私も確認しないといけませんから」

黒沢がなつめの足を持ち上げて、肩に担ぐ体位を作る。足が大きく開かれて、なつめは顔を手で覆った。

「そんな体勢……っ♡おまんこが全部見えてしまいます……っ♡恥ずかしいです……っ」

「見えた方が診察しやすい。おまんこの状態を正面から確認します」

くちゅっ♡とおちんぽを押し当てられる感触。来栖のおちんぽと少し形が違う。硬さも太さも微妙に異なっていて、なつめはまた声が出てしまった。

「っ……♡ちがう……っ♡形が……来栖先生とちがう……っ♡おちんぽの形が……っ♡」

「どう違うんですか」

「言えません……っ♡言えるわけじゃないですか……♡」

「言ってください。記録に必要です」

「……くっきりした形が……おまんこに感じます……っ♡おちんぽが……なかに……っつかかる感じが……あって……っ♡♡」

「カリがおまんこに引っかかる感覚ですか」

「……そ、そうです……っ♡そのたびに……おまんこがきゅってなって……っ♡」

「反応がいい場所ですね」

黒沢は来栖と違い、力強さというよりも的確さを感じる動きをした。おまんこの反応を読みながら、わずかに角度を変えたり、引き抜く速度を変えたりする。

ぬちゅ♡♡ぬちゅ♡♡ぬちゅ♡♡

「はぁ……っ♡あっ♡あっ♡んっ……♡おちんぼが……おまんこの中を……っ♡」

「ここが気持ちいいですか」

「っ……はい……っ♡♡おまんこの浅いところが……ずっとこすられて……っ♡」

「正直ですね」

「だ、だって♡♡正直に言わないと……また聞いてくるじゃないですか
……っ♡」

「賢い」

黒沢がふっと笑う。その笑い方が余裕たっぷりで、なつめは悔しいような恥ずかしいような気持ちになった。

「んあっ♡♡」

「おまんこの音が大きくなってますよ」

「そんなこと……っ♡ないです……ッ♡」

「ないですか」

ぐちゅっ♡♡ぐちゅっ♡♡ぐちゅっ♡♡

「あっ♡あんっ♡ああッ……♡♡もうそんなにおちんぼで突かないで…
…ッ♡おまんこが……こわれちゃう……っ♡♡」

「突くほど声が出るんですね」

「ああっ♡♡」

黒沢がなつめの耳元に顔を近づけながら、腰の動きを大きくした。

ずちゅっ♡♡ずちゅっ♡♡ずちゅっ♡♡ずちゅっ♡♡

「んっ♡あっ♡あっ♡はあッ♡♡おちんぼで……おまんこをかき混ぜない
で……っ♡♡」

堂島がまた横から手を伸ばして、乳首を摘まんだ。

もにゅ♡♡もにゅ♡♡こり♡♡

「あひっ……♡乳首もっ……♡♡おちんぽで突かれながら乳首まで……♡」

「内分泌の反応を確認していますよ」

堂島が穏やかな声で言う。なつめはもう何も言い返せなかった。

ずぷっ♡♡ずぷっ♡♡ずぷっ♡♡

「あっ♡あっ♡あんっ♡あんッ♡♡おちんぽが……おちんぽが奥まで……っ♡」

「もうイきそうですか」

「っ……はい……っ♡はい……黒沢先生のおちんぽが……おまんこの奥を……ゴリゴリして……っ♡イきそうです……っ♡♡」

「もうイきそうなんですか。さっきイってからまだ時間が経っていませんか
よ」

黒沢が意地悪く笑いながら、片手でクリトリスをこりこりと弄る。

こり♡♡こり♡♡こりこり♡♡

「んっ♡♡クリを……クリトリスこりこりされながらおちんぽ突かれたら……っ♡♡イっちゃいます……っ♡♡」

黒沢が腰の動きを一気に加速させた。

ずちゅっ♡♡ずちゅっ♡♡ずんっ♡♡ずんっ♡♡

♡

「んっ♡♡ひっ……♡♡ひあっ……♡♡ああっ……っ♡♡♡♡おちんぽで……おまんこが……っ♡♡」

どちゅんっ♡♡どちゅんっ♡♡

「イク……っ♡イクうっ♡♡イきますッ♡♡♡黒沢先生のおちんぽで……
おまんこイっちゃいます……ッ♡♡」
「どうぞ」

ガクガクガクッ♡♡

なつめはまた激しく体を震わせながら絶頂を迎えた。黒沢がおまんこの奥に押し当てて、どくどくっ♡と放つ。

熱い。おまんこの奥が熱かった。

「は……あ……♡はあ……♡♡は……♡」

「お疲れさまです」

黒沢がすっとおちんぽを引き抜いて、まるで本当に診察を終えたかのような涼しい顔をした。おまんこからとろとろと溢れ出してくる。なつめは

それを感じながら、ぐったりとシーツに沈んだ。

「私で最後ですよ、なつめさん」

堂島が近づいてきたとき、すでに二回の絶頂を経験して全身がぐったりしていた。それでも、堂島の体格を間近に感じると、また心臓がどきどきし始める。

「堂島先生……♡」

「嫌ですか」

「……嫌じゃない……ですけど……っ♡」

「嬉しいです♡」

堂島はゆっくりとなつめの体を起こして、向かい合う形で自分の膝の上

に座らせた。

「この体位で最終確認をします♡」

「こんな……向かい合ってするんですか……っ♡」

「ええ。表情を確認しながらの方が、症状を把握しやすいので♡」

なつめは赤くなった顔をそらせようとしたが、堂島の大きな手が顎をつかんで正面に向けた。

「逃げないでください♡」

静かに、でも絶対的な声で言われて、なつめは目を伏せるしかなかった。堂島のおちんぽがおまんこの入り口にあてがわれる。さっきまでの二人と比べて、明らかに太さが違う。

ずぷっ♡♡

「ふうっ♡」

（堂島先生のおちんぽが……一番ふとい……っ♡おまんこが……ぱんぱんに広げられてる……っ♡）

「痛くないですか」

「痛く……ないです……でも……いっぱいです……っ♡おまんこの中がおちんぽでいっぱい……っ♡♡」

堂島の手がなつめの腰を支えながら、ゆっくりと上下させ始める。

ぬちゅっ♡♡ぬちゅっ♡♡

「なつめさん、自分で腰を動かせますか♡」

「え……っ♡自分で……？♡」

「ええ。おまんこが一番気持ちいいように♡」

「そんな……っ♡そんなこと……できません……っ」

「できますよ♡やってみて♡」

そう言われ、仕方なくおずおずと、ほんの少しだけ腰を動かした。

ずちゅっ♡♡

「んっ……♡おちんぼが……おまんこの中で動いて……っ♡」

「どうですか」

「き……気持ちいいです……っ♡おちんぼがおまんこにぴったり当たって

……っ♡」

「もっと動いてみて」

ずちゅっ♡♡ずちゅっ♡♡ずちゅっ♡♡

「んっ……♡あっ……♡あっ……♡♡おちんぽが……動くたびにおまんこ
がきゅってなって……っ♡」

自分でいいところに当たるように動かしていくうちに、だんだん腰の動きが大きくなっていく。堂島は動かずに、なつめが動くのをただ見ていた。自分で腰を落として、おまんこの深いところにおちんぽを感じていた。
ぐちゅっ♡♡ぐちゅっ♡♡ずぶっ♡♡ずぶっ♡♡

「んっ♡あっ♡あんっ♡♡」

（自分でおちんぽをおまんこに入れて……こんなに……っ♡気持ちよくなってるの……変なのになっ♡♡）

堂島がなつめの背中に大きな手を当てた。その手が、なつめの動きに合わせてそっと押し引きを手伝い始める。

「堂島先生……っ♡」

「頑張ってますね♡」

「んんっ♡そんな、恥ずかしい……っ♡♡」

でも腰は止まらない。止められない。気持ちよくて、堂島の太いおちんぽがおまんこ全体をびったりと満たしていて、動くたびにゾクゾクとした快感が走る。

ぬちゅっ♡♡ぬちゅっ♡♡ぬちゅっ♡♡ぬちゅっ♡♡ずぷっ♡♡ずぷっ♡♡ずんっ♡♡ずんっ♡♡

「あっ♡あっ♡あんっ♡あんっ♡♡んっ♡♡おちんぽ♡おちんぽすごいっ♡♡♡」

目の前に堂島の顔がある。大きくて穏やかな顔が、なつめをじっと見て

いた。

「見ないでくだしゃい♡かお♡見ないで♡♡みないれえ♡♡♡」

「見せてください♡」

「意地悪れす♡♡んッ♡♡んっ♡あっ♡あぁっ♡♡」

堂島が下から少しだけ突き上げた。

どちゅんっ♡♡

「んひいっ♡♡ちよっ♡おちんぼで突き上げないれえ♡♡びっくりした♡

おまんこの奥がっ♡♡♡」

「びっくりしましたか♡」

「しましたっ♡♡でも♡き、気持ちよかったれす♡♡おちんぼの先が子宮

口に♡どちゅんっってきて♡♡♡」

「そうですか♡」

もう一度。

どちゅんっ♡♡

「んッ♡♡ああ♡♡そこっ♡♡そこのおまんこの奥が♡♡一番いいれすう♡♡♡」

「ここが一番気持ちいいですか♡」

「はい♡♡奥♡♡おまんこの奥に♡♡おちんぽが届くのが♡♡いいれす♡♡ずっとそこ♡ずっとそこ突いてほしいれす♡♡♡」

堂島がゆっくりと腰の角度を変えた。なつめの腰を両手でしっかりと掴み、下から突き上げる動きと、なつめが自分で腰を揺らす動きを組み合わせていく。

どちゅっ♡♡どちゅっ♡♡どちゅっ♡♡

「あっ♡あっ♡♡角度が♡さっきとちがう♡♡おちんぼが♡いつもよりもっと奥に♡♡♡」

「ここですか♡」

「それす♡♡♡そのおまんこ♡ずっとゴリゴリしてくださいっ♡♡♡」

自分から言葉が出てしまう。でも止まれなかった。

堂島がその言葉に応えるように、少しだけ腰の動きを大きくした。

ぐちゅっ♡♡ぐちゅっ♡♡ぐちゅっ♡♡ずぶっ♡♡ずぶっ♡♡ずぶっ♡♡

♡

「んあっ♡♡あっ♡♡おちんぼが♡おまんこのなかで♡ぐちゅぐちゅ
いってっ♡♡♡」